

# 保育者は「帰りの集まり」をどのように構想するのか

中島 寿子・大森 洋子\*<sup>1</sup>

A Study on Kindergarden-Teacher's Plan of Meeting with Children before Going Home

NAKASHIMA Hisako, OHMORI Yoko\*<sup>1</sup>

(Received August 3, 2016)

キーワード：帰りの集まり、保育の構想、幼稚園生活

## はじめに

幼稚園教育は一日を単位とした生活の流れを中心に展開される（幼稚園教育要領解説, 2008）<sup>1)</sup>そして、降園前には保育者と子どもたちで集まって一緒に過ごす時間が設けられている（表1参照）<sup>2)</sup>。

横山（2010）はこの「帰りの会」を観察し、幼児にとって「集まる」ことの意味について考察している<sup>2)</sup>。観察された主な内容は、絵本・紙芝居を見る、歌を歌う、保育者の話（連絡等）を聞く、手あそびをする等であり、園によって大きな違いはなかったが、その日の主軸をどこにおくかは、その保育者の考え方と明日に向けての目的によって違っていた。また、その内容や目的は子どもの年齢によっても違いがあり、3歳児では「幼稚園は楽しかった」という思いを持つこと、そのことを確認する場としての位置づけが強く、4歳児ではその日どのような遊びを行ったかという振り返りと、その遊びの内容を全園児に広めるという目的があることが多かった。また、5歳児では次の活動への意識づけという目的が大きく、「話し合い」という形式を持てることも特徴であった。

これらの結果をもとに、横山（2010）は「昨日から今日へ、今日から明日へという連続性を意識したものでなければならない」保育の中で、「帰りの会」は「活動を明日へつなげる」「意識を明日につなげる」という意味において重要な場面であると指摘している。また、子どもが「集まる」場を決めることは、生活の場としての拠点をもつことにもつながり、その拠点には担任としての保育者の存在と保育内容の工夫が必要であると指摘している。

表1 「幼稚園の一日」

登園	・保護者と登園し、保育者と挨拶する。 ・シール帳に出席のシールを貼る。 ・身支度を整える（ロッカーに荷物や上着を置く、タオルやコップを出す等）
登園後の活動	・好きな遊びに取り組む。 ・クラスの子ども全員が集まり、一斉に活動を行う場合もある。
片づけ・お弁当	・それまでの活動に一区切りつけ、遊んでいた遊具の片づけや掃除等を行う。 ・手洗い・うがい等をして、昼食をとる。
午後の活動	・昼食をとった直後のため、比較的ゆったりとした時間を持つことが多い。
帰りの準備	・遊具や保育室の片づけを行う。 ・家に持って帰る荷物の準備をする。 ・保育者と一緒に幼稚園の一日を振り返ったり、明日の幼稚園に期待をもてるような話をしたり、紙芝居を読んだりして、少し落ち着く時間をもつ。
降園	・保護者が迎えにくる。保育者はその日の幼稚園の活動や子どもの様子を保護者に話す。 ・保育者と挨拶を交わし、保護者と降園する。

注) お茶の水女子大学子ども発達教育センター『幼児教育ハンドブック』（2004）をもとに作成

\*1 山口大学教育学部附属幼稚園

請川・山口（2008）も観察と保育者へのインタビューをもとに「帰りの会」について研究している。その結果、保育者が一方的に連絡事項を伝える場合と、子どもとの対話を大事にしようとする場合があり、このことはクラスの雰囲気形成の上で大きな影響をもつのではないかと考察している<sup>注1)</sup>。

これらの先行研究をふまえ、本研究では保育者が帰りの集まりを一日の保育の中でどのように位置づけ、その内容を構想し実践するのかを検討する。その際には、園生活を重ねる中でその内容の変化についても検討する。なお、先行研究では降園前のこの時間を「帰りの会」と表しているが、保育の場では子どもたちに「帰りに」「集まる」という表現を用いることが多いため、本研究では「帰りの集まり」と表すことにする。

## 1. 研究の目的

保育者は幼稚園での帰りの集まりを一日の保育の中でどのように位置づけ、その内容を構想し実践するのか、その内容は園生活を重ねる中でどのように変化するのかについて検討する。

## 2. 研究の方法

### 2-1 対象

保育者はA幼稚園の大森洋子教諭である（以下Yとする）。Yは保育経験が25年以上あり、多くの実践研究にも取り組んできているため、自身の保育について語る力もそなえていると考えられた。

A幼稚園の一日の流れは表1と同じである。午前中はすきな遊びに取り組むことが中心であるが、行事等がある場合には遊戯室に全園児が集まって過ごすこともある。月曜日・木曜日は午前保育であり、毎日保育者と子どもたち全員で集まって過ごすのは、帰りの集まりの時である。

対象クラスは、Yが20XX年度に担任した4歳児クラス（男児13名女児9名計22名）である。A幼稚園の3歳児クラスは1クラスであり、4歳児クラスに進級する際に2クラスにわかれ、そこに新入園児が加わる。Yは進級児にとっても初めての担任保育者であった。

### 2-2 参加観察記録と逐語録の作成

Yが20XX年度に担任した4歳児クラスにおいて、中島（以下Nとする）が保育補助的な働きをしながら参加観察をした。子どもの降園後、保育室内においてYがNにその日の保育実践について自由に語った。参加観察をもとにNが質問したことについてYが語ることもあった。その内容はICレコーダーで録音した。

参加観察の内容は文字記録にまとめ、録音した内容も逐語録として文字化した<sup>注2)</sup>。

### 2-3 分析方法

帰りの集まりの場面の記録と、その場面に関連するYの語りを要約してまとめ、事例とした。これらの事例をもとに、保育者は帰りの集まりを一日の保育の中でどのように位置づけ、その内容を構想して実践するのか、その内容は園生活を重ねる中でどのように変化するのかについて検討する。

なお、事例に取り上げた子どもたちの名前はすべて仮名である。

## 3. 結果と考察

### 3-1 【事例1】1学期 4月26日（表2参照）

年度当初の4月、進級児と新入児と一緒に生活を始めて間もない頃の事例である。この時期Yは一人一人の子どもとかかわりながら、その子どもについて理解し、自分との関係も築いていくことを大切にしていた。

この日の帰りの集まりでは、Yは曲がついた絵本を読んだ後、その曲に自分の名前を入れながら歌った。そして、自分もやってみよう子どもを呼んで膝にのせ、その子どもの名前やその子どもがこの日した遊びを入れて歌っていった。膝の上に座った子どもも、見ている子どもも笑顔になり、最初は離れたところにいたカイも膝の上に座って参加した。この日は欠席の子どもがいたため、Yはその子どもたちのことも一人ずつ名前を挙げながら知らせていた。

新年度が始まったばかりのこの時期、このように保育者が一人一人の子どもを呼びながら一緒に楽

しい時を過ごし、その中で子どもたちもお互いのことを知っていくことは、特に重要である。小川（2010）も入園当初の子どもたちとの関係づくりの中で、保育者が固有名詞で自分の名前を知っていることを子どもに知らせることが最も大事な手だてだと述べている<sup>5)</sup>。また、友定（1993）も「名前がわかる」ことは人との関わりの第一歩であり、4歳児くらいから名前をてがかりにして関係を結ぶようになる」と指摘している<sup>6)</sup>。

Yは子どもたちと歌ったり絵本を読むことも一緒に楽しんでいたが、このことも保育者と子どもたちとの関係づくりの上で重要である。岩田（2007）は「私たちの身体は、他者の身体に同調し、そのリズムにノリ、他者とのノリを共有する仕組みを生まれながらにして持っている」<sup>注3)</sup>ため、「ノリが様式化されている文化財（歌や手遊び、ダンス）や、ノリが潜在化されている文化財（紙芝居、絵本など）」の「ノリを保育者が自身のパフォーマンスによって具現化すること」で「保育者と子どもたち、あるいは子どもたち同士の豊かなノリの共有が可能となる」と述べている（岩田、2011）<sup>7)</sup>。小川（2010）も「手遊びなどの同型的同調が成立する活動」によって「保育者と幼児集団との同型的同調や同型的応答が成立する」ことは「幼児たちが保育者の担当するクラス集団の中に、共同体的絆をつくること」や「保育者と幼児一人一人との絆づくり」につながると述べている<sup>8)</sup>。

表2 【事例1】1学期 4月26日（金）午前保育

この日の帰りの集まり：Nの記録をもとに	
集まって座る	<ul style="list-style-type: none"> <li>保育室の床に四角くテープが貼ってある「おふろ」の中に集まって座る。</li> <li>カイ（進級児）は絵本コーナーにいて、図鑑を見ている。</li> </ul>
歌を歌う	<ul style="list-style-type: none"> <li>『ちゅうりっぷ』『こいのぼり』を歌う。</li> </ul>
絵本を読む	<ul style="list-style-type: none"> <li>Yは子どもたちの前に椅子を置いて座り、文に曲がついている絵本『はじめまして』（新沢としひこ作 大和田美鈴 絵、鈴木出版）を読む。「はじめましてのごあいさつー、〇〇ともうしますー（中略）どうぞこれからよろしくねー」と歌いながら読んでいく。</li> </ul>
歌遊びをする	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵本を読み終わった後、Yは絵本の歌に合わせて「はじめましてのごあいさつー、オオモリヨウコともうしますー（中略）どうぞこれからよろしくねー」と笑顔で歌い、最後に大きくお辞儀をする。そして、「やってみたい人」と聞く。</li> <li>子どもたちはどういうことかよく分かっていない様子で、シホ（新入園児）だけが手をあげる。</li> <li>Yはシホを呼んで膝にのせ、「はじめましてのごあいさつー、〇〇シーホともうしますー（今日遊んだことを入れて）、どうぞこれからよろしくねー」とシホの手をとり、歌に合わせて動かしながら笑顔で歌う。シホもニコニコしている。</li> <li>他の子どもたちも“こういうことか”と分かったようで、次にYが聞くとハイハイと手を挙げる。Yは4人の子どもを順に膝にのせて歌った後、カイを呼んで膝にのせる。Yの膝にのせてもらって遊ぶ中で、カイも笑顔になる。</li> <li>他の子どももしたがるが、Yは今日はここまでで「次はタクちゃんからね」と話す。しかし、タクヤ（新入園児）には意味が伝わらなかったようで、前に出て来ようとして、もう一度Yが説明する。</li> </ul>
今度取り組む製作の話聞く	<ul style="list-style-type: none"> <li>Yが今度「お父さんのこいのぼり」を作ることを話す。それを聞いて「くろ」「あお」等好きな色を言う子どもがいる。</li> <li>Yは少し戸惑った様子で、一緒にいた保育補助のHに用意していた大きなビニール製のこいのぼりを持って来てもらう。</li> <li>Yがこいのぼりを見せて「青でいい？」と尋ね、子どもたちがうなずくと、「H先生と一緒に準備するからね」と話す。</li> </ul>
お休みの子どもの話を聞く	<ul style="list-style-type: none"> <li>Yが欠席だった子どもの話をしようとすると、「3人」と言う子どもがいる。Yは「3人とか知ってるの」と笑顔でこたえ、お休みはマナミ、セイヤ、リョウスケだったことを話す。</li> <li>ハルト（進級児）が「ぼくが座ったのに～」と泣き出す。座っていた場を少し離れた間にスグルが座ったらしい。</li> <li>Yは「スグル君わからなかったんよね」と話す。驚いたスグルはハルトを固い表情で見て、黙ってハルトの頭をなでる。</li> </ul>
絵本を読む	<ul style="list-style-type: none"> <li>Yが『ねずみさんのながいパン』（多田ヒロシ作、こぐま社）を読む。ねずみがフランスパンをかついで走っている表紙の絵を見て、「食べたことある」等、思ったことを言う子どもがいる。たくさんのねずみがテーブルを囲んでいる場面では、「わー、かぞくだらけ」「だいかぞくやね」等言い合っている子どももいる。</li> </ul>
帰りの用意をする	<ul style="list-style-type: none"> <li>Yが帰りの用意をすることを伝え、子どもたちはコップ、タオルを鞆に入れ始める。</li> <li>ハルトはしばらく座ったままである。</li> </ul>
保育後のYの語りから	
<p>○この時期は、一人一人の子どもとかわりながら、その子どもについて理解し、自分との関係も築いていくことがすごく大事。</p> <p>○4月当初は新入園児とのかかわりを中心にしていたが、今日はNが保育に入ったこともあり、進級児としっかりかわりたいと思っていた。進級児の子どもたちとも遊ぶ中で、それぞれの子どもたちがどんな考えやイメージを持っているのかも知ることができた。</p>	

この日Yは今後取り組むこいのぼり製作の話もした。「お父さんのこいのぼり」と聞いて「青」「黒」等自分の好きな色を言っている子どもがいたが、Yはクラス全員で製作する大きな青いこいのぼりを一つ用意していた。そのため、子どもたちにそのこいのぼりを見せて「青でいい？」と尋ね、子どもたちの理解を得た上で話をしていた。Yの子どもたちに対するこのような姿勢は、帰りの集まりに限らず一貫したものであった。請川・山口（2008）が指摘するように、子どもとの対話を大事にしていくことは、クラスの雰囲気形成の上で大きな意味をもつと考えられる。Yが子どもたちと一緒に考えながら今後取り組むことについて話すことは、横山（2010）が指摘するように「活動を明日へつなげる」「意識を明日につなげる」だけでなく、子どもたちが「自分がすること」として主体的に今後の見通しをもつためにも重要である。

新年度当初、Yは子どもたちが集まって座る場所がわかるように、床にテープを四角くはってその中に座るようにしていたが、この日は誕生日も遅く幼いハルトが自分の座る場所をとられたと泣き、その後も気持ちの立て直しがうまくできなかった。「自分の場所」があることが大事なことがわかる。

### 3-2 【事例2】1学期 5月17日（表3参照）

【事例1】から3週間後、お弁当が始まって1週間たった頃の事例である。

Yは前日、「ぼくも～したかった」と言うことが多いタクヤ（表4【事例3】参照）が満足感をもって帰ることができるように、タクヤがしたかった遊びや他の子どもたちがしていた遊びを帰りの集まりの中で一緒に楽しんだ。このような時間をつくることは、横山（2010）が指摘するように、その日どのような遊びを行ったかを振り返り、その遊びの内容を子どもたち全員に広めることにもなる。この日の子どもたちの遊びもそれらの遊びから始まっており、「意識を明日につなげる」（横山, 2010）ことにもなっていた。

この日、タクヤとカイは虫とりに熱中していたが、カイは1匹もとれず、タクヤはせっかくとった蝶が逃

表3 【事例2】1学期 5月17日（金）一日保育

この日の帰りの集まり：Nの記録をもとに	
集まって座る	<ul style="list-style-type: none"> <li>Yが「四角のおふろの中に集まって」と声をかけ、子どもたちは床に貼った四角いテープの中に集まってくる。</li> <li>ベランダにカイとタクヤが座っている。カイはポケット図鑑を一生懸命見ている。タクヤは何か呟いているので、Nが話を聞くと、「ちょうちょが逃げた」と言う。「またとればいいよ」と言うと「うちでとる」と言い、保育室に戻る。カイも戻る。</li> </ul>
手遊び『あたま・かた・ひざ・ぼん』をする	<ul style="list-style-type: none"> <li>Yがカイを膝にのせ、手遊び『あたま・かた・ひざ・ぼん』をする。「てーはー」の後は、膝に座っている子どもの真似をする。カイはうれいような照れているような何とも言えない表情をする。</li> <li>終わった後はその子どもが次の子どもの名前を呼んで決めるようにしていく。ヒロムが膝にのったときは、わざとおどけた表情をし続ける。その表情を見て、子どもたちも笑う。</li> <li>ハルトもあててもらい、Yの膝にのせてもらう。</li> </ul>
園庭の固定遊具の話聞く	<ul style="list-style-type: none"> <li>Yは園庭の固定遊具グローブジャングルの写真に「ぐるーぶじゃんぐる」と書いたものを子どもたちに見せ、「これはグローブジャングルと言います。グローブジャングルに集まってと言ったら、ここに集まってね」と話す。</li> <li>保育室の裏にある固定遊具「わくわくとりで」についても写真を見せながら話をする。</li> </ul>
絵本を読む	<ul style="list-style-type: none"> <li>Yが絵本を読むよと言うと、「えー」と言う子どももいたが、絵本『すっぽんぼんのすけ』（もとしたいずみ作 荒井良二絵、鈴木出版）を読み始めると集中して聞く。</li> </ul>
来週月曜日の避難訓練の話聞く	<ul style="list-style-type: none"> <li>Yが火事の家で消防士が消火している絵を見せて、「火事になったらどうする？」と尋ねる。</li> <li>「いやだ」と答える子どもがいる。次に「にげる」という子どもがいる。</li> <li>それを聞き、Yは「本当の火事ではない」けれど、月曜日に「逃げる練習」をすることを話す。</li> </ul>
帰りの用意をする	<ul style="list-style-type: none"> <li>Yが数名ずつ子どもたちの名前を呼び、呼ばれた子どもから帰りの用意を始める。</li> </ul>
保育後のYの語りから	
<p>○前日はCDに合わせ、女兒と交代しながら戦いごっこをする男児たちがいた。片づけになってタクヤが「ぼくもしたかった」と言ったが、砂場の片づけをしていなかたので、一緒に片づけをした。タクヤには「ぼくもしたかったのにできなかった」という思いがあったので、降園前に一度全員で集まり、「こんなことができるんだよ」と言って女兒がプリキュアを踊り、タクヤも入って男児が戦いごっこをして見せ合った。</p> <p>○今日の朝、男児はこの遊びから始まる子どもが多かった。女兒も昨日のプリキュアの服を着るところから始まった。</p> <p>○タクヤとカイは今虫とりに夢中だが、今日タクヤはせっかくとった蝶が逃げてしまった。カイは蝶がとれなかった。悲しいのは仕方ない。そのうち入って来るかなと様子を見ていると、二人とも切り替えて帰って来た。カイは甘えん坊のところがあるので、膝に呼ぶと座った。</p> <p>○互いの名前を覚えていきつつあるので、遊びの中で次の人をあてることも時々入れようと思っていた。ちょうどよいと思い、手遊びをした。</p> <p>○ハルトが「次ぼくあてて」と言ったので、頼んであててもらった。ハルトは、前は集まりの時によく寝転がっていたが、随分そういうことがなくなった。</p>	

げてしまい、帰りの集まりの時間になってもすぐには戻って来なかった。しかし、Yは無理には誘わず、二人が自分で気持ちを立て直して戻って来るのを待っていた。そして、実際に二人は自分たちで保育室に戻ってきた。

Yは戻ってきたカイから膝に乗せ、この日も手遊びを楽しんだ。そして、最後は膝に乗った子どもが考えたポーズをみんなで真似をして遊ぶ楽しさを味わうことができるようにしていた。また、子どもたちがお互いの名前を覚えてきたこともあり、膝の上に座った子どもが次の子どもを呼ぶようにして、自分で考えて友だちの名前を呼ぶ喜び、友だちに自分の名前を呼んでもらう喜びも味わえるようにしていた。【事例1】では泣いた後に気持ちの立て直しがうまくできなかったハルトも、この日は自分から「ぼくをあてて」と言ったため、Yは膝の上に座った子どもに頼んであててもらっていた。

この日Yは園庭の固定遊具の名前を知らせることもしていた。この時期になると、子どもたちは自分ですきな遊びを見つけ、園内のあちこちで遊ぶようになってきており、全員で遊びの場についてのイメージの共有をはかるためと考えられた。Yは子どもたちが自分で考えて遊ぶことができるように、また、全員で共通理解ができるように、帰りの集まりの中で道具・用具・材料の使い方について話すこともあった。

翌週の月曜日には新入児にとっては初めての避難訓練があるため、「火事になったらどうする？」と問いかけ、「避難訓練」をするのはなぜかを自分なりに考えながら見通しをもつことができるようにもしていた。

### 3-3 【事例3】1学期 6月7日（表4参照）

【事例2】からさらに3週間後の事例である。この日の女兒たちは、いつもとは違う遊びから始めたが、弁当の前になっていつもの遊びをしたいと言いつつ出た。しかし、午後にも保護者の読み聞かせがあったため、Yは帰る前にしようと提案した。また、この日は『はらぺこあおむし』のペープサート作りが男児たちの中で生まれたため、Yは段ボール製の舞台と『はらぺこあおむし』のCDを用意した。そして、Nや興味をもって集まって来た子どもたちがお客になり、音楽に合わせてペープサートを動かして遊ぶことを楽しんだ。

このような一日の終わりの帰りの集まりの中で、Yは女兒たちがしたかった遊びとこの日男児たちの中で生まれた遊びを楽しみ、他の子どもたちにも見てもらうようにした。このような時間をつくることは、自分がしたかった遊びができたという満足感をもって帰ることができるだけでなく、他の子どもの遊びに興味をもつことで、子ども同士の関係や遊びをさらに広げることにつながる。

表4 【事例3】1学期 6月7日（金）一日保育

この日の帰りの集まり：Nの記録をもとに	
お姫様やプリキュアが出てくる劇遊びをする	<ul style="list-style-type: none"> <li>全員が保育室に集まると、女兒たちがいつも劇遊びをしているベランダへ出る。女兒たちはてきぱきと劇遊びの準備を始める。</li> <li>Yは他の子どもたちに「見ててね」と話し、女兒たちと一緒に準備をする。</li> <li>Nはお客になろうと思ひ、近くにあったベンチに座る。そこにタクヤが来て、「したかった」と言う。</li> <li>ミオは「しない」と言う。ベランダに面したままごとコーナーの窓にぬいぐるみの犬を置き、「ここから見てる」と言う。</li> <li>女兒たちはいつも楽しんでいる「Y扮する悪者に捕えられたお姫様をプリキュアたちが助けに来る」という劇遊びをする。</li> </ul>
『はらぺこあおむし』のペープサート劇をする	<ul style="list-style-type: none"> <li>Yは保育室内に段ボール製の舞台を設置し、『はらぺこあおむし』のペープサート劇の準備をする。</li> <li>男児たちも自分が作ったペープサートを急いで持って来て、はりきって準備をする。</li> <li>ここでもタクヤは「したかった」とNに言う。それで「今日は見ってから、作ろう」と話し、膝の上に呼ぶと座る。Yも「今日は作った人でしょう。他の人は見て今度作ろう」と話す。この日遊んだ男児たちが『はらぺこあおむし』の劇をする。</li> </ul>
帰りの用意をする	<ul style="list-style-type: none"> <li>ユウは自分の作ったペープサートを持って帰る準備をしている。</li> <li>Nが「持って帰るの？」と尋ねると、「また（幼稚園で）作る」と言い、持って帰る。</li> </ul>
保育後のYの語りから	
<p>○最近女兒たちはプリキュアの遊びから始めていたが、今日はままごとコーナーの遊びから始まり、池でのアメンボとりにも行った。</p> <p>○しかし、片づけの時間になった頃にやはりいつもの遊びをしたいと言いつつ始めた。午後には初めての保護者の読み聞かせの時間もあったため、「帰る時にしよう」「あおむしもしよう」「1時には帰って来てね」と伝えると、結構すぐに帰って来た。</p> <p>○『はらぺこあおむし』は絵本、歌、パネルシアター等で楽しんできた。塗絵も用意していたが、ペープサート遊びになったのは予想外だった。</p> <p>○タクヤは入園当初は「これをしたかった」ではなく、「まだ遊びたかった」と言って帰りたがらなかった。彼の中ではまだ時間の見通しはないので、ずっと虫とりをしていて、そう言えばしたかったという感じだろうか。そういう人は一番したいことをして一日が終わってしまう。</p>	

### 3-4 【事例4】1学期 7月4日（表5参照）

この日は園にいただいたスイカを一緒に食べた。A幼稚園では5歳児が栽培した野菜を調理して3・4歳児にふるまったり、園内の木々の実を一緒に食べることがしばしばあった。このような時間をつくることで、子どもたちはこの日だけの特別なものを一緒に食べる喜びを味わうことができる。

この頃には子どもたちが遊びの中で様々なものを作らようになっており、Yはその日子どもが作ったものを紹介することも増えた。子どもたちは自分の作ったものを紹介してもらうことを喜び、自分から紹介したいと言う子どもも増えた。ユウは毎日虫の絵を描き続けていたが、描いた後はそのまま放りっぱなしのことが多かった。そのため、Yが紙を綴じてノートを作ると、ユウはそのノートに絵を描き続けた。Yはこの日の帰りの集まりでその絵を子どもたちに紹介した。すると、ユウと同様にいろいろなものを作って遊ぶことがすきで、虫の絵も描いていたセイヤは「自分も描いた」とうれしそうに言っていた。このような時間があることで、子どもたちは自分と同じことに興味をもつ友だちを知ることできる。

Yはこの日、翌日にある七夕の集いの話をして、楽しみにして待つことの喜びを一緒に味わうことができるようにもしていた。また、明日は登園して願い事を書くことも伝え、子どもたちが「願い事」について自分なりに考えてくることができるように、「先生だったら、みんなが元気に遊べますように」と話していた。Yの保育者としての思いや願いを子どもたちにも伝える場にもなっていることがわかる。

### 3-5 【事例5】2学期 8月30日（表6参照）

このクラスの子どもたちは話すことがすきなため、Yは帰りの集まりの中で「自分のことを話す」「友だちの話聞く」時間をつくることもしばしばあった。そして、子どもたちの育ちに合わせて、その内容も変えて行った。紙幅の都合から、2学期・3学期については、その内容を中心に上げる。

【事例5】は2学期始業式の翌日の事例である。前日の始業式の日には、夏休みの話をする時間をつくり、数名の子どもが話をした。この日は夏休み中に誕生日を迎えた子どもたちの誕生会をした。

誕生会は大きくなった自分のことをみんなが祝ってくれる喜びを味わうことができるうれしい時である。Yは誕生日の子どもに“マイクでインタビューをする”ふりをしながら質問し、その子どもが答えるというやりとりをして見せた後、「質問がある人」と尋ねた。すると、この日も子どもたちはハイハイと手を挙げた。Yは誕生日の子どもが質問する子どもを決めるようにし、その子どもの質問を繰り返しながら確認したり、さらに聞き出ししたりしながら、子ども同士で「質問する」「答える」というやりとりを楽しみ、自分のことを知ってもらい喜び、友だちのことを知る喜びを味わえるようにしていた。また、誕生日の子どもの答えを聞き、「～がすきな人」と問いかけて「すきなことが一緒だ」という喜びが味わえるようにもしていた。

その中で「ピンクがすきな人」と聞かれ、男児で一人だけ手を挙げたヒロムに「えー？」と言う子どもがいた時には、「男の子でピンクがすきな人もいるよね。先生も青とか黒とかすきだよ」とさりげなく話していた。このような保育者の言葉は、子どもたちの中に偏ったものの見方、考え方を生んだり、特定の子どもに言うことに同調してしまう関係性をつくらないようにするためにも重要である。

表5 【事例4】1学期 7月4日（木）午前保育

この日の帰りの集まり（一部）：Nの記録をもとに	
スイカを食べる	<ul style="list-style-type: none"> <li>幼稚園にいただいたスイカを切り分けたものを保育補助Kが小さな皿にのせる。</li> <li>Y・K・Nで子どもたち一人一人に渡すと、「食べたくない」という子どもはおらず、みんなよく食べる。</li> </ul>
ユウの虫の本についての紹介を聞く	<ul style="list-style-type: none"> <li>Yがユウがいろいろな虫の絵を描いたので、本にしたと子どもたちに話す。それぞれのページに描いてある絵を見せていく。</li> <li>セイヤはそれを見て、自分も描いたとうれしそうに言う。</li> </ul>
明日の七夕の集いの話を聞く	<ul style="list-style-type: none"> <li>Yは明日は七夕の集いがあること、アイスを食べることを説明する。そして、「明日幼稚園に来たら、おうちの人とお願いをこれに書くよ」と言って短冊を見せる。Yは「先生だったら、みんなが元気に遊べますように」と説明する。</li> </ul>
保育後のYの語りから	
<ul style="list-style-type: none"> <li>○虫がすきな子どもが多く、ユウは先週くらいから毎日捕まえた虫を描いていた。それで、「こんなふうにしてあげよう」と言っ</li> <li>てノートを作ると、またそれに描いていた。しかし、すぐ放ったままにしている。</li> <li>○セイヤも虫を描いていた。昨日はタクヤも描いた。「博物館にする」というので、段ボールに貼ったりした。</li> <li>○今日セイヤが恐竜を描きだしたのもその続きかなと思った。セイヤの発想の面白さが他の子どもにも伝わってほしいと思い、一緒に5歳児がしていた「恐竜博物館」を見に行った。すると、その後にセイヤが中心となって恐竜博物館を作ることを楽しむことができた。</li> </ul>	

### 3-6 【事例6】3学期 1月10日（表7参照）

3学期が始まり、帰りの集まりの中でお正月の話をした二日目の事例である。日頃なかなかあててもらうことが少ない子どもも話してほしいと願っていたYは、数日かけて全員が話せるようにしようと考えていた。

また、この時も話した子どもが次に話す子どもを決めるようにして、誰をあてるのか見てみたいとも思っていた。Yはこのような時間をつくる理由の一つとして、この時期になると好きな遊びを一緒に楽しむことの多い子どもとだけではなく、同じクラスの子とも同士としての関係性ができてくるため、男女も関係なく友だちをあてることができることを挙げていた。

表6 【事例5】2学期 8月30日（金）午前保育

この日の帰りの集まり（一部）：Nの記録をもとに	
誕生日の子どもにYがインタビューするのを聞く	<ul style="list-style-type: none"> <li>夏休み中に誕生日を迎えたタケル、カイ、レイのお祝いをする。</li> <li>Yは3人の中で一番誕生日が早かったタケルを呼ぶ。タケルは子どもたちが座っている前に置いた台の上に立つ。</li> <li>Yは“マイクを持ってインタビューする”ふりをしながら、タケルに「何歳になりましたか？」と聞くと、タケルは「5歳！」と答える。「大きくなったら何になりたいですか？」と聞くと、「キョウリュウジャー！」と答える。</li> </ul>
友だちからの質問に誕生日の子どもが答える	<ul style="list-style-type: none"> <li>その後、Yが「タケル君に質問がある人」と聞くと、子どもたちは「ハイハイハイ！」と手を挙げる。</li> <li>タケルが質問する子どもの名前を言ったり、指さしたりする。Yはその様子を見て、質問する子どもを確認したり、子どもからの質問が伝わりにくい部分は言葉をそえてタケルに伝える。</li> <li>タケルは「好きな食べ物は何ですか？」と質問されると、「にんじん！ピーマンも」と答える。「好きな果物はなんですか？」と質問されると、少し考えて「ぶどう」と答える。その後、カイ、レイにも同じように質問をする。</li> <li>カイが「好きなおやつはなんですか？」と質問され、「チョコチップ！」と答えると、Yは「チョコチップが好きな人」と尋ねる。子どもたちは「ハイ！」と手をあげる。「好きなお魚はなんですか？」という質問には、Yは「ああ、好きなお魚」言ってカイの答えを待つ。カイが少し考えて「シロナガスクジラ」と答えると、「ああ、シロナガスクジラ。シロナガスクジラって、こーんなにおっきいんだよね」と両手を大きく広げて言う。</li> <li>レイが「好きな色はなんですか？」と質問されて、「ピンク」と答えた時には、「ああ、ピンク」と言い、ままごとコーナーを指して「今日もピンクのドレス着たよね」と言う。そして、「ピンクが好きな人」と子どもたちに尋ねると、男児ではヒロムだけが「ハイ」と手を挙げる。「えー？」と言っている子どもたちに気づいたYは、「男の子でピンクが好きな人もあるよね。先生も青とか黒とかすきだよ」と話す。</li> </ul>
保育後のYの語りから	
<p>○昨日の始業式の日、「夏休みのこと話してね」と言うと、5人くらい話をした。カイは「水族館に行って」「それはさわられるところの水族館でね」「ぼくはナマコを触ったよ」等話し、話が上手だった。子どもたちは「明日も話したい」と言っていた。</p> <p>○今日は3人も誕生会をするから無理だなと思っていたが、誰もそれを話したいとは言わなかった。でも、話したい気持ちはあるのかなと思う。</p>	

表7 【事例6】3学期 1月10日（金）午前保育

この日の帰りの集まり（一部）：Nの記録をもとに	
お正月の話をする	<ul style="list-style-type: none"> <li>数名がお正月の話をする。話し終わると、次に話したい子どもが手を挙げ、話した子どもがあてていく。</li> <li>コウタも祖母の家に行った話をして、お土産のおかしをみんなに配る。</li> <li>リョウスケもたどたどしい話し方だが、一生懸命話をする。Yは「うんうん」とうなずきながら話を聞いていると、ユウたち数名が「うんうん」と少しからかうような感じで言う。</li> </ul>
保育後のYの語りから	
<p>○この子どもたちは話すのが好きなので、帰りの集まりでお正月の話をするを昨日から始めている。4歳のわりにはよく話す。昨日も「コマしたり、羽つきしたり」等、「～たり、～たり」と話していた。いつも言いたくてもあててもらえないリョウスケのような子どもも話せるように、全員話すまでしようと思っている。誰をあてるのか見るのも面白いと思い、話した子どもに次の子どもをあててもらおうと思った。</p> <p>○昨日タケルが祖母の家に行った話をいろいろして、お土産のおかしをみんなに配った。</p> <p>○コウタからもお土産を預かっていた。コウタはこういう時には手を挙げないので、昨日の降園時に「明日手を挙げて、僕はおばあちゃんの家に行ったって言ってから、お菓子を配ろう」と話してみると、「うん」と言って帰った。今日手を挙げていたので、コウタをあててとお願いした。</p> <p>○3学期になると、コマ回しをクラスの男女一緒に競う等、日頃好きな遊びを一緒に楽しむ仲よしとは別の関係性ができてくる。だから、男女関係なくあてられる頃かなと思ったりもする。</p> <p>○リョウスケがどんな話をするのかみんなに関心をもってほしいと思っていた分、他の子どもたちの時よりも「うんうん」「あ、～だね」等、自分が言っていたので、ユウたちが真似した感じもあった気がする。普通にさらっと聞いた方がよかった。リョウスケはユウのことが大好きなのだが、ユウはリョウスケの言うことはわからないと言うことが時々ある。</p>	

すると、この日は日頃あててもらったことのないリョウスケも話すことができた。「リョウスケがどんな話をするのかみんなに関心をもってほしい」と願うYは、たどたどしいリョウスケの話を他の子どもに対してよりもさらに一生懸命「うんうん」とうなずいて聞いたり、言ったことを繰り返して確認したりしていた。その時に、からかうような感じで「うんうん」と言う子どもがいたことを振り返り、Yは「もっとさらっと聞けばよかった」と語った。

Yはこのような時に手を挙げないコウタにも話してほしいと願っていたため、前日の降園時に「明日手を挙げて（祖母の家に）僕は行ったって言ってから（Yが預かっているお土産の）お菓子を配ろう」とコウタに話してみた。すると、コウタは「うん」と言って帰り、この日自分から手を挙げて話していた。

### 3-7【事例7】3学期 2月21日（表8参照）

3学期も後半になり、5歳児が担当するうさぎの飼育当番の仕事を教えてもらい始めた日の事例である。最初に飼育当番を体験するグループにはハルトもいた。Yはハルトがうさぎと触れ合う姿を見たことがなかったが、ハルトも飼育当番に参加して、うさぎを抱っこすることもできていた。

この日、Yは帰りの集まりの中で、飼育当番を体験した子どもたちが話をする時間をつくった。その中でハルトも自分が体験した飼育当番についてしっかりと話し、ハルトにとってこの体験がとても意味のあるものであったことが窺えた。1学期当初は帰りの集まりでも寝転んでいたり、自分の座る場所がとられたと言って泣いて気持ちの立て直しがうまくできないことがあったハルトの大きな成長が感じられた日であった。

このように、Yは年度末の頃になると、子どもたちが自分の好きなこと、話したいことだけではなく、自分が体験した役割について話す時間をつくった。他の子どもたちも、このような友だちの話を聞くことで、これから自分たちが取り組むことへの期待や見通しをもつこともできる。Yがこのクラスの子どもたちの好きな「自分のことを話す」「友だちの話を聞く」ための時間も、子どもたちの育ちに合わせ、保育者としての一人一人の子どもへの願いもこめながらつくっていることがわかる。

表8 【事例7】3学期 2月21日（金）一日保育

この日の帰りの集まり（一部）：Nの記録をもとに	
今日初めて体験した飼育当番の話を する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Yが今日は〇〇組（5歳児クラス）の人に教えてもらい、〇〇グループの人がうさぎ当番をしたよと子どもたちに話す。</li> <li>・うさぎ当番をしたグループの子どもたちが前に出て、どのようなことをしたか一人ずつ話をする。</li> <li>・当番をしたハルトも、自分のしたことについてしっかりと話をする。</li> </ul>
保育後のYの語りから	
<p>〇うさぎの世話という仕事が5歳児クラスになったらあること、こういうことをするらしいということ、5歳児に教えてもらったということが子どもの中に残ればいいなと思っていた。今日のグループではハルトがうさぎを抱っこしているのを見たことがなかったが、他の子どもは飼育小屋によく行っていたため、扱いに慣れていた。ハルトも飼育当番をして、うさぎも抱っこできていた。</p> <p>〇ハルトは1月の誕生日の時もいろいろと話をした。誕生日のお祝いの日には園でおやつを用意し、誕生日の子どもが配ってみんな食べているため、ハルトは母親に「誕生日だからおやつを買わないといけない」と言ったそうだ。いろんなことをよく考えているんだなと思った。</p>	

## おわりに

本研究では、保育者が帰りの集まりを一日の保育の中でどのように位置づけ、その内容を構想し実践するのか、その内容は園生活を重ねる中でどのように変化するのかについて検討してきた。

本研究の対象となったA幼稚園の生活は、子どもが好きな遊びに取り組むことを中心としているが、一日の幼稚園生活の終わりには毎日保育者と子どもたちで集まり同じ時を過ごしている。Yは、帰りの集まりがそのような時であること、その時期の子どもたちに大切にしたいことをもとに内容を構想し実践していた。また、園生活を重ねる中で子どもたちの育ちに合わせ、その内容も変化させていった。

本研究で明らかになったことを以下にまとめる。

1. Yは帰りの集まりの中で、「保育者と子どもたちと一緒に楽しい時を過ごし、その中で保育者と一人一人の子どもの関係をつくり、子ども同士の関係もつくっていくこと」を大切にしていた。年度当初は保育者と子どもたちと一緒に遊ぶことの楽しさを伝えることから始め（【事例1】）、子どもたちが園生活



- に慣れてきてお互いのことも知るようになると、子ども同士で名前を呼び合って遊ぶ楽しさや自分が考えたことを取り入れて遊ぶ楽しさを味わうことができるようにしていった（【事例2】）。また、この日ならではのものを一緒に食べる喜びを味わう時間をつくることもしばしばあった（【事例4】）。
2. 帰りの集まりに参加する気持ちにならない子どもがいた場合には、無理に誘うのではなく、自分で気持ちを立て直したり、楽しい雰囲気の中で自分から参加しようとするを大切にしていた（【事例1】【事例2】）。
  3. Yは「子どもたちが一日の幼稚園生活に満足して帰ること」も大切にしており、その日したい遊びができなかった子どもがいた場合には、帰りの集まりの中でその遊びを一緒に楽しむこともあった（【事例2】【事例3】）。また、その日子どもたちの中に生まれた遊びを帰りの集まりの中で一緒に楽しみ、他の子どもたちもその遊びを見ることができるようになることもあった（【事例3】）。そして、そこで楽しんだ遊びが翌日の遊びにつながることもあった（【事例2】）。
  4. 子どもたちが自分で好きな遊びを見つけ、園内のあちこちで遊ぶようになってくると、園庭にある遊具についても具体的に知らせ、遊びの場のイメージの共有をはかっていた。自分で考えて遊ぶことができるように、また、全員で共通理解ができるように、道具・用具・材料の使い方について話をすることもあった（【事例2】）。子どもたちが遊びの中で様々なものを作るようになると、その日子どもが作ったものを紹介することも増えた。子どもたちは自分の作ったものを紹介してもらうことを喜び、自分から紹介したいと言う子どもも増えた（【事例4】）。
  5. Yは「子どもたちが今後取り組むことを楽しみに待ったり、見通しをもつことができること」も大切にしていた。その際には、子どもたちが「自分がすることとして主体的に見通しをもつこと」ができるように、子どもたちと一緒に考えながら話をしていた（【事例1】）。また、初めて体験することについても、なぜそれをするのかを子どもが自分なりに考えながら見通しがもてるようにしていた（【事例2】）。  
1学期の後半になると、翌日の予定を伝えながら、自分なりにどのようなことを考えてくるとよいかを具体例を挙げながら話すこともあった（【事例4】）。そして、3学期も後半になった頃には、5歳児から引き継ぐことを始めた飼育当番の体験を子どもたちが話す時間をつくり、これから自分たちが担う役割についての見通しをもつことができるようにしていた（【事例7】）。
  6. Yはこのクラスの子どもたちが好きな「自分のことを話す」「友だちの話を聞く」時間を帰りの集まりの中でつくることもしばしばあった。そして、一緒に話を聞きながら、子どもの言ったことを繰り返して確認したり、さらに聞き出したりしながら、「質問する」「答える」というやりとりを楽しむことができるようにし、自分のことを知ってもらう喜び、友だちのことを知る喜びも味わうことができるようにしていた。その際には、子どもの答えを聞いて「～が好きな人」と問いかけ、「好きなことが一緒だ」という喜びを味わうことができるようにすることもあった（【事例5】）。  
3学期に入る頃になると、クラスの子ども同士の関係性がさらに育っていくことを願い、「全員が自分のことを話す」「友だち全員の話聞く」時間もつくっていた。その中で、日頃はなかあててもらえない子どもが話すことができた時には、他の子どもたちがその子どもの話に関心をもつことができるようにと願い、一生懸命話を聞きながらその子どもの言ったことを繰り返して確認したり、さらに聞き出したりしながら話が伝わるようにしていた。また、このような時に手を挙げることのない子どもとも話をし、自分から手を挙げて話す機会をつくるようにしていた（【事例6】）。そして、3学期後半には、子どもたちが自分の好きなこと、話したいことだけではなく、前述のように5歳児から教えてもらい自分が体験した仕事・役割について話す時間もつくようになった（【事例7】）。
  7. Yは子どもたちと話をする中で、「保育者としての願いや思いを伝えること」もしていた。願い事を考えてくる話をする時の例として「先生だったら、みんなが元気に遊べますように」と話したり（【事例4】）、子どもたちの言動に気になる点があった場合には、さりげなく自分の考えを話すようにしていた（【事例6】）。
  8. 幼稚園教育は一日を単位とした生活の流れを中心に展開されるもの（幼稚園教育要領解説, 2008）であるとともに、「昨日から今日へ、今日から明日へという連続性を意識したものでなければならない」（横山, 2010）。帰りの集まりも、一日の保育の中でその時間だけが独立したものではなく、保育者の一貫した子ども観、保育観をもとにその内容が構想し実践されていることも、Yの実践と自身の実践についての語りをもとに確認することができた。

## 注

- 1) 秋田 (2011) も「子どもが自身の経験を振り返ること、それを仲間と共有することで、互いに受け入れ合い語り合う中で一体感を醸し、一日を感じてまた明日以後への期待を生み出す時間」としての帰りの会の重要性を指摘している。
- 秋田喜代美：園のくらしをはぐくむ15 帰りの会の振り返りとけじめ, 幼児の教育, 110-6, 60-63, 2011.
- 2) 本研究で取り上げた記録および語りの一部は、以下の拙著においても取り上げている。
- 中島寿子・大森洋子：保育行為の判断の根拠についての一考察, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 37, 117-133, 2014.
- 中島寿子・大森洋子：保育者は一日の保育をどのように構想するのか, 山口大学教育学部研究論叢第3部, 64, 161-174, 2014.
- 中島寿子・大森洋子：保育を振り返る語りに表れた子ども理解, 山口大学教育学部研究論叢第3部, 65, 237-250, 2015.
- 3) 岩田 (2007) は以下の著書において「ノリとは、関係的存在としての身体における行動の基底にあるリズムおよびその顕在の程度、すなわちリズム感、また身体と世界との関係から生み出される調子、気分のことである」と定義しており、この言葉を用いることで、群れや集団の動き方を雰囲気を表したり、演じ手や語り手の構え（動き方や発話の仕方）も表すことができると述べている。
- 岩田遵子：現代社会における「子ども文化」成立の可能性—ノリを媒介とするコミュニケーションを通して, 風間書房, 115, 2007.

## 引用文献

- 1) 文部科学省：幼稚園教育要領解説, フレーベル館, 186, 2008.
- 2) お茶の水女子大学子ども発達教育センター：幼児教育ハンドブック, 61-72, 2004.
- 3) 横山文樹：幼児にとって「集まる」ことの意味—幼稚園の「お帰り」からの考察—, 昭和女子大学学苑, 836, 33-44, 2010.
- 4) 請川滋大・山口宗兼：幼稚園における「帰りの会」の研究—「帰りの会」の構造分析の試み—, 日本女子大学紀要家政学部, 55, 31-39, 2008.
- 5) 小川博久：遊び保育論, 萌文書林, 70-71, 2010.
- 6) 友定啓子：幼児の笑いと言達, 勁草書房, 87-88, 1993.
- 7) 岩田遵子：「保育実践への取り組みの実際」について, 中山昌樹・小川博久編：遊び保育の実践, ななみ書房, 102-112, 2011.
- 8) 小川：前掲書5) 68-69.

## 参考文献

- 大場牧夫：個と集団の育ち, 原点に子どもを, 建帛社, 27-55, 1994.
- 大森洋子：遊びと生活の中で人とのかかわりを育てる, 友定啓子・小田豊編, 保育内容人間関係, 光生館, 109-119, 2008.
- 小川博久・岩田遵子：子どもの「居場所」を求めて—子ども集団の連帯性と規範形成—, ななみ書房, 2009.
- 中島寿子：園生活におけるクラスの意味についての一考察, 愛知教育大学幼児教育研究, 10, 9-16, 2001.